

汎発性腹膜炎に対するエンドトキシン吸着の有効性に関する検討

由利組合総合病院 泌尿器科

飯沼昌宏、北島正一

The Efficacy of Endotoxin Adsorbing Therapy on Panperitonitis

Masahiro Inuma, Seiichi Kitajima

Department of Urology, Yuri Kumiai General Hospital

エンドトキシン（以下Et）は多臓器不全の基礎疾患あるいは合併症としてのSIRS（Systemic Inflammatory Response Syndrome）や敗血症に関与するといわれる。当院では下部消化管穿孔による汎発性腹膜炎といった、Et血症が疑われる症例に対し可及的早期にEt吸着療法（以下PMX）を行っており、本法の有効性を検討した。

対象：症例はPMX施行群6例（表 症例1～症例6）と非施行群（表 症例7～症例12）の計12例である。施行群6例の平均年齢は80.8歳、男性4例、女性2例であった。重症度判定としてAPACHE IIスコア⁽¹⁾を用い、平均23.7点だった。PMX回数は平均1.7回だった。死亡した1例は術後に脳卒中を併発した症例だった。非施行群6例の平均年齢は81.5歳、全例女性で、APACHE IIスコアは平均23.8点だった。2例が死亡した。

表 対象患者

症例	年齢	性別	診断	APACHE II	吸着回数	転帰
1	88	男	S状結腸穿孔	25	2	生
2	81	女	横行結腸憩室穿孔	20	1	生
3	72	女	S状結腸癌穿孔	19	3	生
4	92	男	S状結腸捻転	21	1	生
5	71	男	S状結腸憩室穿孔	22	1	生
6	81	男	S状憩室，直腸壊死	35	2	死
7	81	女	下行結腸穿孔	22	-	死
8	90	女	S状結腸憩室穿孔	25	-	死
9	84	女	S状結腸癌穿孔	24	-	生
10	76	女	S状結腸穿孔	18	-	生
11	79	女	S状結腸癌穿孔	30	-	生
12	79	女	回腸穿孔・イレウス	24	-	生

方法：PMXはICU入室直後に行った。大腿静脈に留置したダブルルーメンカテーテルをブラッドアクセスとし1回あたり2時間行った。抗凝固剤には nafamostat mesilateを用いた。

結果：PMX施行前後で血中Et濃度は低下傾向にあったが有意な変化を認めなかった。PMX施行後、収縮期血圧は有意に上昇し、ドーパミン使用量は有意に減少した（図1）。尿量は有意に増加し、酸素化能指数も有意に改善した（図2）。

図1 血圧とドーパミン使用量

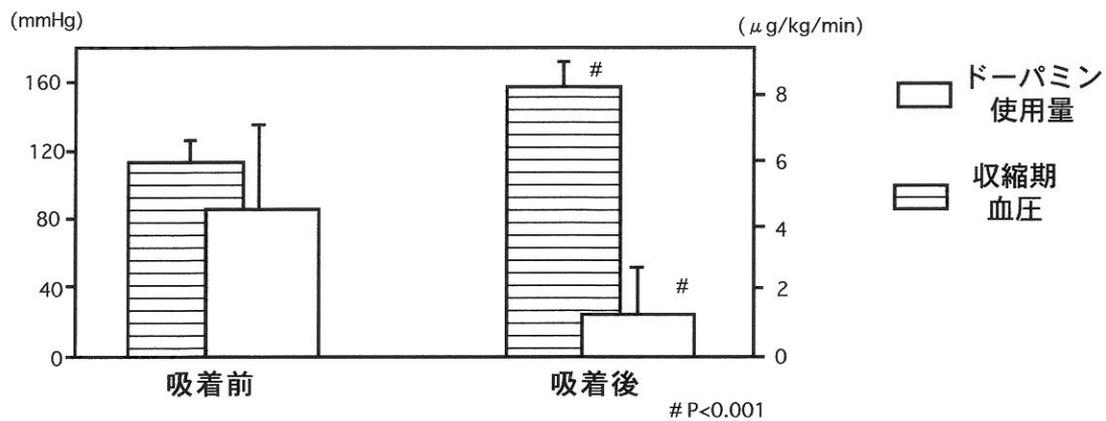
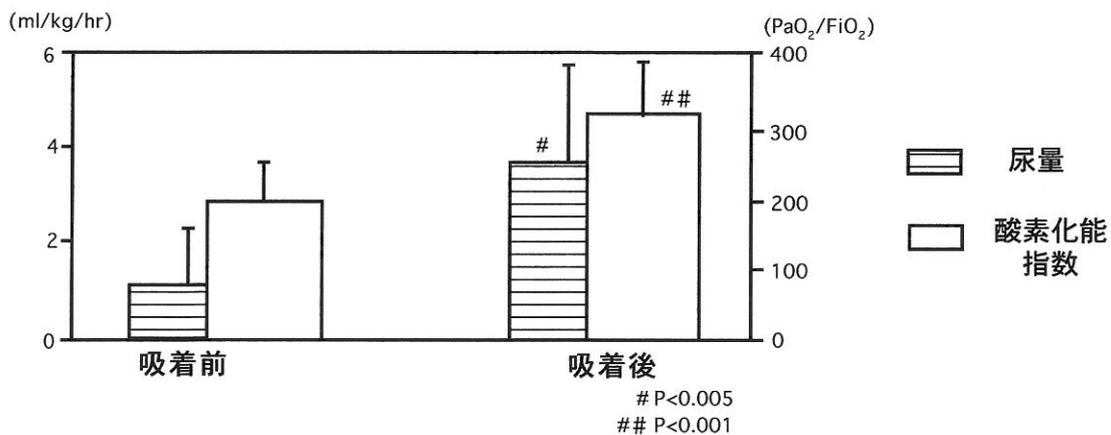


図2 臨床パラメーターの変化



病態重症化防止効果としてレスピレータ使用時間とICU入室時間を指標とした。レスピレータ使用時間はPMX施行群59.8±35.2時間に対し非施行群169.2±83時間、ICU入室期間は4.5±3.7日に対し11.2±6日とPMX施行群が有意に短かった。

考察：PMXは日本で開発されたEt除去に関する治療法で⁽²⁾、現時点でEt血症に臨床応用されている唯一の治療法である。安全性と有効性は多くの論文で報告されてきた⁽²⁾⁽³⁾。当科施行例でも血圧、尿量、酸素化能指数といった臨床パラメーターの有意な改善を認めた。今回の検討では病態

重症化防止効果としてレスピレーター使用時間とICU入室期間を用いた。どちらもPMX施行群で有意に短縮し、一時的な臨床パラメーターの改善でなく、病態の重症化防止にPMXが有効であることを示唆した。当科施行例では全例感染病巣に対する処置が終了した直後にPMXを施行した。この結果Etの供給は減少し、さらにPMXによる一時的Et除去が加わり、生体本来のEt処理能力に回復のチャンスを与え重症化防止に効果が有ったと思われた。

参 考 文 献

- (1) Knaus WA, Zimmerman JE, Wagner DP, et al : APACHE-II : A severity of disease classification. Crit Care Med 13 : 818-829, 1985.
- (2) 小玉正智、谷 徹、前川一彦、他：重症敗血症に対する流血中エンドトキシン除去治療ーポリミキシン固定化カラムによる血液還流療法ー。日外会誌96：277-85, 1995.
- (3) 谷 徹、花澤一芳、遠藤善祐、他：MOF患者における血液浄化法の選択：エンドトキシン吸着器の有効性と限界。ICUとCCU 19：797-804, 1995.